

意味に基づく英語文法教育論

—動詞、アスペクト、時制篇—

濱本秀樹

はじめに

本小論は濱本（2011）「意味に基づく英語文法教育論 一名詞を中心に」の続編である。濱本（2011）では言語学習に関わる基本概念を概説した後、名詞の意味論、冠詞の意味論の概説とそれぞれの教育方法論について議論した。言語学習に関わる基本概念は動詞を扱うこの論文においても基盤的意味を持つ。そこで簡単に第1節でこの基本概念を確認することにする。その後、2節では動詞（句）の意味論と関連するアスペクトの意味論を説明し、3節では時制、特に現在完了形と未来表現を取り上げる。4節では早期英語教育に焦点をあててアスペクト、時制、未来表現と現在完了に関する指導法の一端を紹介する。5節は総括である。また動詞を中心にした議論ではモダリティ、構文論も当然扱わねばならないがそれらの問題は紙数のこともあり稿を改めることにする。

第1節 言語教育に関連する基礎概念

この節では言語教育に関連して重要であると思える諸概念について簡単に説明する（詳しくは濱本（2011）を参照されたい）。重要な概念は (i)心の理論と推論、(ii)身体化された認知とジェスチャー、(iii)社会文化理論である。

1.1 心の理論と推論

Tomasello (2003)、Bloom (2000, 2002) らを中心とする認知心理学、発達心理学、認知言語学の立場から「心の理論」という考えが提案された。そこでの中心概念は「意図読み取り能力」と「パターン抽出能力」である。言語コミュニケーションでは記号の使用を前提とする。記号とは第3の事物を示す道具であるが自分と他者との意図理解を必要とする。「その本！」という言葉を見たとき、相手の意図、すなわち「私が本に注意を向けるという私の注意状態の変化の要請」という意図を理解しなければならない。同時に、自分が言葉を使用する場合、相手にこちらの意図を理解してもらう必要がある。このような相互の意図の理解を可能にする能力を「意図読み取り」という。また「パターン抽出能力」とは言語記号を構造化しているそのパターンを取り出して理解できる能力のことである。我々は英語教育の対象者である児童、生徒、さらに成人にも「意図読み取り能力」、「パターン抽出力」ともに十分備わっていると考える。このような認知能力は生後9ヶ月頃発現し、衰えることなく機能するからである (Tomasello 1999)。

しかし、言語習得のプロセスで子供は自分で音と意味（つまり、指示対象）との関係を発見しなければならない。つまり、言語記号の使用からその意味をどのように発見していくのかという「発見のプロセス」が説明されなければならないという点が重要になる。この発見の仕組みを著者は仮説形成推論という概念で説明する。これはある意外な事実の観察から、その事実がなぜ起こったのかを説明し得るとされる仮説を作り出すことである。故に、言語習得には「心の理論」と「仮説形成推論」、さらに発見した規則を検証する「帰納的推論」が関与すると著者は考える。

1.2 身体化された認知とジェスチャー

我々の現実世界の把握の仕方や見方は、我々の身体の性質やその身体の使い方、身体を使って環境を知覚する仕方に制約されているという (Lakoff 1987)。この見解に従うと心と身体は完全に分離されたものではないことに

なる。例えば我々が他者の鉛筆をつかむ、笑う、泣くなどの行為を見ると、自分自身がそれらの行為をした時に活性化されるニューロンの運動回路部分が活性化され、それを通じて行為の意味を理解する。このような知覚の在り方を「身体化された認知」(embodied cognition) という (Gibbs 2006)。他者の行為を自分の行為との関係で捉える能力が、他者と共感でき、他者がどのように感じ、何を経験しているのかを理解する基盤にあり、先に述べた心の理論の形成を助けるのである。さらに談話での身体化された認知の表出としてジェスチャーにも注目しなければならない。発話形成とジェスチャーには強い関連が認められるからである

1.3 言語習得の社会的側面—社会文化理論

Swain (2000) は、「インプット」「アウトプット」という用語に代え社会文化理論的に「協同的対話」(collaborative dialogue) と呼ぶことを提案している。このように社会文化理論が言語学習に関して適切な条件を提示できると主張する新ヴィゴツキ派の第2言語習得論研究者たちは「言語とは思考の道具であり、知的精神活動における媒介手段である」と考えている。この観点から、学習そのものも媒介的な過程であり、社会的に媒介されるものであるとする。この考えはさらに関連する下記の概念を呼び起こす。

(1) 段階的・随意的支援の定義

(a) 段階的支援 (graduated assistance)

支援が段階的であるとはそれが学習者が必要とする最小程度であることをいう。

(b) 随意的支援 (contingent assistance)

支援が随意的であるとはそれが学習者から要請された時にのみ与えられることをいう。

(2) 適切な指導方策 (Johnson 2004:138-141 を少し修正したもの)

(a) 教授者の介入は最も間接的なもの (implicit level) から始めなければな

らない。

- (b) 教授者は自分自身も対話の参加者として位置づけ、学習者との協同的環境を作りタスクを達成できるようにする。

つまり、談話の持つ社会的交流という性質を第二言語学習に取り入れる際に、上記(1)(2)が考慮されなければならないのである。以上で言語教育に関連して留意すべき3種概念についての確認を終了した。次節では言語教育で問題となる動詞と動詞句の意味論的諸問題を解説することにする。

第2節 動詞(句)とアスペクトの意味論

動詞とは何かを考えてみよう。『広辞苑』では「事物の動作・作用・状態・存在などを時間的に持続し、時間的に変化して行くものとしてとらえて表現する語」となっている。ある物や事が時間の経過の中で、動いたり、ある状態を維持する、その有様を描写する語という捉え方である。「時間」と物事の動きや変化とは密接不可分である。この「動きや変化」は自分の外側の世界のことだけでなく、心の中の「動きや変化」も含めて考えることにする。時間の経過の中で動作、状態を描写するのが動詞ということになる。¹

2.1 事態とアスペクト

時間の流れを線的なもの、すなわち過去から現在点を経て、未来へと続く一本の線と考える。ノートに書いた鉛筆の線も細かく見てみれば点の集まったものであり、時間という線も瞬間点の集まったものをイメージする。一瞬、一瞬が集まって時間になっていくというように考える。時間の線の幅を「時間区間」と言うことにする。また事態(event)は動詞だけでなく、主語や目的語になる名詞などと組み合わせり「主語—述語」というかたまり、つまり文で表現される。文の表現する事態の時間のことを「事態の時間」(event time)という。また文を口に出して言うことを「発話」(utterance)という。発話は物理的な現象で口に出して言うときすぐに消えて

いってしまう。発話の時間のことを「発話時間 (utterance time)」という。

ある事態をどのように捉えるかをアスペクトという。また人の事態の捉え方を視覚になぞらえて**視覚範囲** (viewing scope) と呼ぶ。視覚範囲は大きく事態を捉える最大範囲 (maximal scope) と、より制限された範囲を捉える制限的範囲 (restricted scope) がある。事態は有界的なものとは非有界的なものに分けられる。ある事態が時間の流れの中で始点、終点を持つと捉えられるタイプ (例 John walked to the station) を有界的 (bounded process: perfective) という。また始点と終点がないと捉えられるタイプ (例 Kyoko resembles her mother) を非有界的 (unbounded process: imperfective) という。この有界的・非有界的という区別は進行形に関わってくる。

- (3) a.*John paints a wall right now.
- b. John is painting a wall right now.
- c. John resembles his father.
- d.*John is resembling his father.

有界的な動詞の現在形は目の前の事態を描写できない。(3 a)では、「壁を塗る」という行為の完結を発話時間内にまで見届けて、それを報告することができない。描写しようとする行為の一部だけ見て「壁を塗っている」というためには(3 b)のように進行形にしなければならない。進行形は完結したかどうかは描写しておらず、あくまで「壁をぬる、その行為の過程にジョンはいる」という未完了状況 (imperfective situation) を表現している。Langacker (2001b) は現在形では眼前で進行中の行為を描写できないことを次のように説明する。

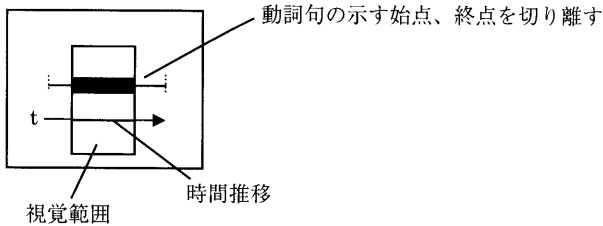
- (4) 英語の現在形の現在時点の描写の制限
 - (i) 発話時点は常に「現在」である。
 - (ii) また現在形は現在に視覚範囲 (意識領域) があり、今この現在時点で

観察できることを捉える。

- (iii) そうすると、現在形ではある事態を観察しそれを描写することは発話時間に限定される。
- (iv) 通常、行為の完結を見届けるのに必要な時間区間は発話の長さを越えている。
- (v) 故に現在形では行為を描写できない。

Langacker によれば進行形の機能とは「行為のその始点と終点が視覚範囲（意識）から切り離され、その間にくるその行為の典型的な部分を描写する」ということになる。これは下の(5)に示されている。

(5) 進行形 (progressive) の働き



これによれば非有界的な状態動詞は元々始点、終点がないので進行形をわざわざ付けてそれらを消す必要がないので進行形になれないのである ((3 d))。事態の捉え方をアスペクトというのであるから、進行形は行為の終点を意識外に置き、その真ん中の部分を捉える働きをするアスペクトであることになる。

2.2 動詞の分類

ここで時間との関係でどのような動作、状態を表す動詞があるのかその分類を考えてみよう。Zeno Vendler という哲学者が動詞を4つに分類している。彼は動詞を、副詞との共起関係、時制、論理的含意というような観点からながめるとおおむね4つのグループに分かれることに気づいたので

ある。彼はこの4つのグループを状態動詞 (state), 行為動詞 (activities), 達成動詞 (accomplishments), 到達動詞 (achievements) と名づけた。さらに Radden and Dirven (2007) では到達動詞から瞬間動詞を区別し、5分類にしている。ここではこの5分類に従う。次にそれぞれの例をあげておく。

(6) 動詞の5分類と例

行為動詞 (activity verbs)	run, swim, walk, push a cart, drive a car
状態動詞 (stative verbs)	know, believe, have, desire, love, weigh, resemble, belong to, ache, itch
達成動詞 (accomplishment verbs)	paint a picture, make a chair, draw a circle, light a fire, write a letter
到達動詞 (achievement verbs)	enter a room, arrive at the station, reach the summit, win the game
瞬間動詞 (action verbs)	burp, kick somebody, skip, find something,

次にそれぞれの動詞のグループについてももう少し詳しく見てみることにする。

2.2.1 行為動詞 (activity verbs)

walk, swim など、動作を示す動詞を「行為動詞」(activity verb) という。それでは walk (「歩く」) の意味を考えてみよう。「片足を上げ、それを前に出し、地面につけ、反対の足をあげ、それを前に出し、地面につける」というような細かい動作の断片の規則正しい繰り返しに walk という言葉に対応させているのである。walk (「歩く」) と run (「走る」) ではどう違うのだろうか。walk では、かならず一方の足が地面に触れているが run (「走る」) では、片一方の足が地面につく前にもう片一方の足があがり始めるために、どちらの足も空中にある時がある。そこが walk (「歩く」) との違いになる。このように行為動詞の意味を捉えるには、瞬間点だけ見るの

ではなく、必ず動作の断片をいくつか観察する必要がある。つまり、必ず幅のある時間区間でみなければならないということである。だから動作の断片（足を前に出したりすること）を e で示すと行為動詞は次のように図示できる。

(7) 行為動詞 : $[e_1, e_2, e_3 \dots e_m]$ $[e_1, e_2, e_3 \dots e_m]$ $[e_1, e_2, e_3 \dots e_m]$
……繰り返し

動作の断片が複数連続して walk を構成し、それが反復されるのである。

もちろん walk には意思が関与するので、歩きはじめ、歩き終わりは当然考えられる。歩いていない状況と歩いている状況との間には「境界」(boundary) がある。これは Taro resemble his father (太郎は彼の父に似ている) の中の状態動詞 resemble (似ている) のようなものとはかなり異なる。resemble では似ることの始まりと終わりが考えられず、境界がないと認識されるからである。境界があるものを「有界的」(bounded)、境界がないものを「非有界的」(unbounded) と考えることができる。つまり行為動詞は有界的、状態動詞は非有界的である。²

文が伝える出来事の時間とその文を口に出して言う、つまり発話する時間の2つを区別しなければならない。Kyoko walked では「京子は歩いた」という意味で、発話時点 (= 今) より以前、つまり過去に「京子が歩く」という出来事が起こっていることを示す。もちろんどこかで京子は歩くのを止めただろうがそれはこの文からはうかがい知れない。動作の終了時点が意味に組み込まれていないからである。一方、Kyoko walked to the station になると「京子は駅まで歩いた」ということで動作の終了ポイントが明瞭になる (これは達成動詞に分類される)。動詞の分類といっても、実際には副詞句なども含めた用法で考えなくてはならないということがこの例からも分かる。

2.2.2 状態動詞

状態動詞は「ある状態が成立する」ことを示す。状態とは一定の有様のことであり時間が経過しても一定の有様が続くことを状態が成立しているというのである。英語の resemble (似ている) は典型的な状態動詞であり、先にも述べたが「似ているという状態が成立している」ことを示し、始点、終点は感じられない。「似ている」には「歩く」のような断片的な少しずつ異なる動作の連続はない。一定の均質的有様がずっと直線的に続いている感じである。図示すると、

(8) 状態動詞 : [..... e.e.e.e.e.e.e.e.e.e,]

始め、終わりが不明瞭で金太郎飴のようにどの瞬間でも均質

さて *Kyoko resembled her mother* (京子はお母さんに似ていた) という文を考える。この文がある過去の時間区間で本当だった (真という) とすると、その区間のどの瞬間でもこの文は成り立つ。この文が成立するかどうかは、長々と観察しなくてもほんの一瞬観察すればよいということになる。このように、ある状態動詞を持つ文がある時間の区間で成立するなら、その時間区間内のどの時点でもやはりその文が成立することがいえるので現在形のまま現在の状態を示すことができる。

(9) a. *John lives with his parents in Sydney.*

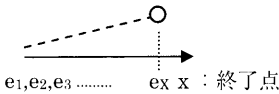
b. *John is living with his parents in Sydney.*

非有界的状态動詞 *live* でも進行形を形成することがある。この場合、行為動詞の進行形とは逆に始点と終点が視覚範囲の外側に含意される。(9 b) は「今は両親と暮らしているが・・・」という含みが生まれ、状態が永続的でないことを含意する。

2.2.3 達成動詞

さて draw a circle 「円を一つ描く」のような表現では、円を描いている途中では「円を描いた」といえない。円を描いている途中では進行形を使う。円を一つ描き終わってはじめて「円を一つ描いた」といえる。また walk のような行為動詞と似ているのは少しずつ異なる動作の断片が連続し、やがて一つの動作となるという点である。違うところは walk では終了点が不明瞭で「歩く」動作 (= $[e_1, e_2, e_3 \dots e_m]$) が繰り返されると考えられるに対し、達成動詞では完結点が明瞭であることである。

(10) 達成動詞

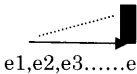


達成動詞の場合も進行形にしなければ現在の動作を示すことができない。

2.2.4 到達動詞

到達動詞とは reach the summit, arrive at the station, win the game のように、「頂上や駅、勝利に近づく」というような動作を積み上げていく局面 (culminating phase) があって最後に目標点に至る、という意味をもつ。

(11) 到達動詞 :



Kyoko reached the summit of Mt. Rokko 「京子は六甲の頂上に着いた」と言えるのは、厳密には、京子が頂上に最後の一步を踏み下ろした瞬間に限られる。到達動詞では「動作の積み上げ期間の存在」は含意されるが、達成動詞とは違い、どのような動作の積み上げであるかは意味に含まれていない。達成動詞を含む Kyoko drew a picture ならば「描く」という一連の

動作の結果、「一枚の絵を描いた」となるのであるが、Kyoko reached the summit では途中の動作の部分はどうのような様態でも良い。

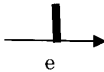
- (12) a. John climbed the steep cliff and reached the summit.
b. John roped up the cliff and reached the summit.
c. John traveled up on the chair lift and reached the summit.

焦点はあくまで「到達の一瞬」にあるという点だが、達成に至る過程も意味に含む達成動詞とは異なる。

2. 2. 5 瞬間動詞

瞬間動詞は burp (ゲップする)、blow off a candle (ろうそくを吹き消す)、knock at the door (ドアをノックする) のように瞬間の出来事を描写する。一瞬のため始点、終点を区別が不可能であり、またそこに至る過程も表現されない。ただ一瞬の出来事の生起があるだけである。

(13)



2. 3 動詞の意味的性質

以上で動詞の5分類とその基本的性質を確認した。さらに各タイプの動詞の意味論的な特徴を見ていく。

2. 3. 1 進行形

既に説明した進行形との共起性についてまとめておくことにしよう。

- (14) a. Kyoko is pushing the cart. (行為動詞)
b.*Kyoko is knowing his name. (状態動詞)

- c. Kyoko is drawing a circle. (達成動詞)
- d.?Kyoko is reaching the summit (到達動詞)
- e.?The baby is burping (瞬間動詞)

以上でみるように、英語の5種類の動詞を含む文のうち、行為動詞、達成動詞は進行形になることができるが、状態動詞は不可能である。³また、到達動詞や瞬間動詞は進行形にすると元の意味とは変わってくる。(14 d)は「頂上に近づいていく」という意味なら容認可能である。また(14 e)は「何度も繰り返しゲップしている」の意味なら容認可能である。先にも述べたが進行形の役割は次のように要約される。

(15) 進行形の機能

- (a) 動詞の表す動作の開始点と終了点を意識から外す。
- (b) 動作の開始、終了の間の部分に意識を向けさせる。
- (c) その結果、進行形はある動詞の示す動作の典型的な部分の作業中に主語がいることを示す

このことから(14 b)の know のようにもともと開始点、終了点の意識されない状態動詞では進行形にする必要がない。行為動詞 (walk, push the cart など) の意味的性質として「終了点は不明瞭」と述べた。しかし「不明瞭」にせよどこかで行為の終了はあるはずである。進行形にするとそのどこかにはあるはずの終了点と開始点の両方が意識から外され、その中間にある典型的動作部分に注意が向けられる。(14 c)の達成動詞の場合、終了点の円を描き終わった時点ではなく、それまでの円を描いている部分に京子は取り組んでいる、という意味になる。(14 d)では「京子は頂上に着こうとしている」という解釈が可能であるがこれは reach the summit を行為動詞と捉えなおしており「頂上へと向かう」行為としているため元の「到達の瞬間性」はなくなっている。瞬間動詞の burp も瞬間の動作であるから開始、終了点を分離できずそれを意識から外すこともできない。そのため瞬間動

詞はそのままでは進行形と共起できない。上記の例は「その赤ちゃんは何度もゲップしている」という反復読みになる。

2.3.2 前置詞句の in + 時間、for+ 時間との共起関係

まず下の例を見ていただきたい。

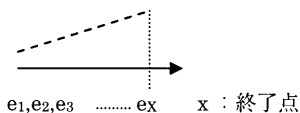
- (16) a. Kyoko pushed the cart for 30 minutes.
b. Kyoko knew Yoko for many years.
c. Kyoko drew a circle in 2 seconds.
d. Kyoko reached the summit in 3 hours.

このように for+3 hour (3時間のあいだ)、in + 3 hours (3時間で) という時間副詞類との相性の違いが各動詞には認められる。行為動詞、状態動詞は共通点としてその示す動作や状態に均質性があることがあげられる。

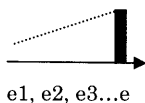
- (17) a. 行為動詞 : [e₁, e₂, e₃ e_m] [e₁, e₂, e₃ e_m] [e₁, e₂, e₃ e_m]
b. 状態動詞 : [..... e, e, e, e, e, e, e, e, e,]

[for + 時間] 表現はこの均質的な部分についてどのくらいの時間区間であるかを表示する。そのため均質性を持つ行為動詞や状態動詞では [for + 時間] 表現が使われる。(16 a)は「京子は30分そのカートを押した」、(16 b)は「京子は陽子のことを長年知っていた(陽子は京子の長年の知りあいだ)」となる。一方、[in + 時間] 表現はその動作が終了するまでの時間を描写する。従って達成動詞や到達動詞のような終了点が意味に含まれたものでなければ使えない。この達成動詞と到達動詞の終了点の含まれた様子を次の図で確認してほしい。

(18) a. 達成動詞



b. 到達動詞



(16 c)は「京子は2秒で円を一つ描いた」は円を描き終わるまでの時間区間が2秒であること、(16 d)は「京子は3時間で頂上に到着した」は頂上に到達するという瞬間までの時間区間が3時間という意味である。

2.3.3 単純現在形の解釈

ここでは単純現在形で用いられた時の意味について、各動詞の種類で違いが出てくることを確認する。現在形は中学などで最初に教えられるが解釈は難しい。

- (19) a. Kyoko drives a car.
b. Kyoko is driving a car.
c. Kyoko knows the news.
d.*Kyoko is knowing the news.
e. Kyoko draws a circle.
f. Kyoko is drawing a circle.
g. Yamamoto reaches the turn.
h. Yamamoto is reaching the turn.
i. I hereby pronounce you man and wife. (Langacker 2001b)
j. Your driver's license expires on your next birthday. (Langacker

2001b) .

- k. Obama shows determination to win reelection. (The Daily Yomiuri, January 27, 2012)
- l. I put a tablespoon of butter in the pan. It melts quickly. Now I put the fillet in. I cook it at a low temperature for five minutes. (Langacker 2001b)

(19 a)の行為動詞の現在形は「京子は車の運転が出来る、京子は車の運転を仕事にしている」というような主語の能力、習慣、仕事などという属性を示す。「今、京子は車を運転している」という目の前の有様を描写するには進行形である。(19 c)の know the news のような状態動詞では、そのまま今の事態を描写できる。(19 d)のように進行形は非文法的である。行為動詞とよく似た事は、(19 e, f)の達成動詞の draw a circle でも言える。しかし、(19 e)は「京子は円を描ける」という属性解釈はやや不自然で、「京子は円を描く」というような演劇のト書きなどがもっと自然な解釈である。また、京子が赤ちゃんでまだ絵など描けないと思っていたところが、見事な円を描いた、その時、目の前で起こった動作を感嘆して伝えるような場合「京子が円を描いたよ！」という解釈でも現在形は使える。しかし普通に眼の前で円を描いている有様を伝えようとする場合、やはり進行形(19 f)にする。(19 g)の到達動詞 reach the turn (折り返し点に到着する)では「山本選手、折り返し点！」というような、ワンシーンを伝える実況放送などの解釈は可能である。これは目の前で起こった動作を感嘆して伝える場合の一種である。また到達動詞は「瞬間性」を持つため、進行形にして終了点を消すことは解釈上難しく行為動詞に再解釈し「京子は折り返し点にむかっている」という行為動詞の進行形読みとなる。単純現在形は各タイプの動詞の持つ意味から様々な解釈になるのである。さらに(19 i)は遂行動詞の場合である。発話行為が直ちに描写する行為になるのだから発話時と完全に同時性がある。(19 j)は未来のことを述べている。(19 k)は新聞の見出しである。Obama 大統領が再選への決心を述べたのは3日前であ

る。(19 l)は料理番組で実演者が手順を説明しながら料理を進めていく場面であり、当然発話時間より各事態の進行が長く時間がかかる(バターは *It melts quickly* を発話する間には溶けない)。これらの例を見る限りでは現在時制は発話の時間区間に限定されることは少なく、「未来」や「過去」を含む様々な時間に言及している。

Langacker (2001b) によれば、現在時制はプロファイルを受けた(つまり狭い視覚領域内で捉えられた)プロセスの全体が正確に発話の時間と一致する仕方では出現することを示すことが本来の意義であると述べている。またその規定からはずれた、発話時から逸脱した現在時制の用法は仮想世界(virtual world)での事態の出現が発話時と一致すると説明している。Langacker (2009) では、以上を多少言い換えて、本来的な発話時との一致を持つ現在時制の意義をプロトタイプ的とし、発話時とは逸脱したケースを認識論的即時性としスキーマ的な特性とみなしている。⁴

第3節 時制の意味論—現在完了形と未来表現

ここでは時制の問題のうち、学習者にとって理解の難しい現在完了形と未来表現に限定して話しを進めることにする。現在完了はアスペクトと理解されることが多い。過去形では話者の意識の焦点が現在からみて先行する過去時に置かれているのに対し、現在完了では意識の焦点は現在にある。このことから、現在完了は過去の事態の捉え方とすればアスペクト的であるが過去との対比を中心に据えれば時制と理解される。ここでは Radden & Dirven (2007) に従い、時制として現在完了を取り上げる。

3.1 現在完了の意味論

「過去形は遠い過去、現在完了形は比較的近い過去」と考えている人も多いが、実際には過去形で最近のことを表現したり、現在完了形で相当昔のことを表現したりもするのでこの単純化は成立しない。ただ主観的には現在完了の描写する状況は心理的には必ず現在に繋がることに留意しなければならない。また Radden & Dirven (2007) によれば米国文化圏では英国

文化圏ほど現在完了形を使わず過去形で代用する傾向があるという。いくつかの言語（フランス語、イタリア語など）で近過去用法など現在完了相当の文法項目が単純過去として広く使用される傾向がみられる（Girogi & Pianesi 1997）。米国の場合は過去形が現在完了の意味領域に浸潤するという点でこの逆である。いずれにせよ良く似た意味領域に関与する過去形と現在完了形は対比的に理解されねばならないし、学習者にも違いを説明できなければならない。現在完了形の意義は次の3つに要約される（Radden & Dirven 2007、Meyer-Viol & Jones 2011）。

- (20) (i) 現在時に焦点 (focus on the present time)
- (ii) 現在への関わり (current relevance)
- (iii) 不定性 (indefiniteness)

現在完了の形式である [HAVE + 過去分詞] において have は存在の意味を持つ。現在のある状態を今持っている、それが今成立していることを示す。これが現在時に焦点が置かれているということである。一方過去分詞はその示す事態が時間的に先行していることを示す。同時にその過去の事態は定的ではなく不定的で時間軸の中で明確に位置付けられて意識されているものではない。結局、現在完了形の基本的意味は「現在から見ると、先行する不定的に捉えられた事態があり、その事態は現在に及ぶ関連性を持つ」ということである。確認のため例を見てみよう。

- (21) a.*Einstein has visited Princeton.
 - b. Princeton has been visited by Einstein.
 - c.*I have seen him this morning. [said in the afternoon]
 - d. I have seen him this morning [said that morning]
- (以上、Meyer-Viol & Jones 2011)

(21a)はアインシュタインがトピックの場合、非文である。一方(21b)はプ

リンストン大学がトピックである。プリンストンは現在も存続しているので容認される。これは現在完了が結局、現在に関する何かに言及しなければならないという「現在時に焦点がある」という制限で説明される。また(21c)は話者が午後発話した場合であり、その時には午前は終了し完結性のある時間区分、すなわち定的と捉えられるからである。

3. 1. 1 現在完了の用法

現在完了の形式は [HAVE + 過去分詞で表現される先行事態 (anterior situation)] というものであり、先行事態を示す動詞のタイプに応じて用法が区別される。しかし下で詳しく見るように各用法は、結局、過去の事態の現在への繋がり方が問題になり、それは(i)伴立により導かれるか(ii)関連性のある含意により導かれるため、それぞれが完全に独立的な概念区分ではなく意味的要素が重複しており連続的な概念と見るべきである。

3. 1. 1. 1 完了用法と結果用法

完了用法は完了した過去の事態が現在に何らかの影響を残しているという基本的意味を持つ。この現在への影響が伴立によって明確に示される場合を結果用法として区別することもできる (Radden & Dirven 2007)。伴立 (entailment) とは、「ある事態 p が成立すれば必然的に q が生起される場合、事態 p は事態 q を伴立する」という論理関係のことである。先行事態が有界的で目的完結性を持つ動詞 (bounded and telic verbs) で表現される場合には現在への関連が伴立で導出され結果用法になる。有界的で目的完結性を持つ動詞には達成動詞、到達動詞、一部の瞬間動詞がある。これらの動詞の現在完了形は結果状態に焦点が当てられるが結果状態は現在時にまで繋がるものである。

- (22) a. Taro has repaired his camera.
b. Taro has passed the bar exam.
c. Taro has blown off the candle.

d. The baby has burped.

(22 a) の repair his camera は達成動詞であり完結点がある。Taro repair his camera が成立すれば必ず His camera was usable を伴立する。つまり結果状態は「太郎のカメラは現在使用可能な状態にある」というものである。(22 b) の pass the bar exam は到達動詞でこれも到達点がある。結果状態は「従って太郎は今弁護士である」というものである。(22 c) では blow off the candle は瞬間動詞であり、結果状態は「今ろうソクは消えている」ということである。これらの結果状態は伴立 (entailment) であり、完結点・到達点に至れば当然、それが成立する。伴立は意味の一部であり、取り消すことはできない。下の例を参照されたい。

- (23) a. *Taro has repaired his camera, but it doesn't work.
b. *Taro has passed the bar exam, but he is not qualified as a lawyer.
c. *Taro has blown off the candle, but it is still burning.

ところで(22 d) も瞬間動詞であるが「ゲップした」ことの結果状態は伴立ではなく推論されねばならない。例えば「だからその赤ちゃんは胃にガスがたまっていない」、「胃の働きは正常だ」、「もう授乳しても大丈夫だ」など様々である。この様な場合、ある行為が現在の直前に終了し何らかの関連性を現在時に与えているという完了用法と捉えることができる。これは先行事態が burp のような瞬間動詞、行為動詞の場合であり、かつ直前であることを示す時間副詞 (句) just, now, already, this morning などが付随することが多い。

- (24) a. Kyoko has just played the piano. (So she will not play the piano anymore tonight.)
b. Kenji has already walked in the park. (So he is ready for his breakfast now.)

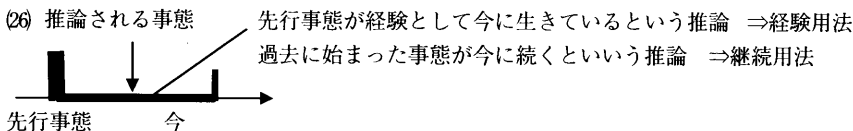
上の例で（ ）内は現在への関連の可能な解釈の例である。完了用法の中で結果状態が明瞭なものが結果用法であるから、完了用法の部分集合として結果用法があるということになる。

3.1.2 経験用法と継続用法

結果状態が伴立ではなく推論で導出されるケースには次の2つの用法も含まれる。

- (25) a. I have lived in Italy for 3 years.
b. I have lived in Italy since 1975.
c. I have worked for ANA for 5 years.
d. I have worked for ANA since 1975.
e. Have you ever been imprisoned?
f. How many years have you been imprisoned since then?
g. We have been engaged for over a year.

先行事態を示す動詞は、状態動詞 (live)、行為動詞 (work for) であり、どちらも完結性がなく (atelic)、伴立される結果状態はない。従って、現在に関わる結果状態は推論により導かれざるを得ない。ここで経験の用法とは先行事態の現在への関連が「今も保持している経験」と推論される場合であり、(25 a, c, e) はそれぞれ「3年イタリアに住むという経験を持っている」、「全日空に5年務めた経験がある」、「投獄された経験を持っているか」というものである。一方、継続用法では「～から始まった事態が今も続いている」というように今に続く継続性が推論される場合である。(25 b, d, f) はそれぞれ「1975年以來今までイタリアで暮らしている」、「1975年以來今まで全日空に勤めている」、「それ以來収監されて今で何年か」という意味である。以上の解釈は時間副詞句の意味的働きにより推論が誘導されるという点に注意しなければならない。経験と継続を図示してみよう。



しかし現在への関連性が推論されるだけであるため推論は取り消し可能である。例えば(25 a) I have lived in Italy for 3 years では先行事態が「イタリアに3年住んだ」であり、その経験を現在時保持しているのであれば経験用法であるが、これも「今で3年になる」という解釈も可能であり、この場合継続用法で理解される。さらに I have lived in Italy for 3 years now と now を追加すれば経験ではなく継続的解釈が強化される。さらに I have been living in Italy for 3 years と現在完了進行形にすれば、進行形は事態の終了点を視覚領域（意識）から外す作用があることから、終端点、すなわちイタリア暮らしの終了が消され、そのため「今も住んでいる」という解釈が優勢になる。用法の議論をまとめておきたい。

(27) 先行事態の現在への関連性が伴立で導出される（達成動詞、到達動詞、一部の瞬間動詞）⇒ 結果用法

先行事態の現在への関連性が推論で導出される

直前性がある（行為動詞、瞬間動詞）⇒完了用法

今も持っている経験（行為動詞、状態動詞）

⇒経験用法

今に続く継続（状態動詞、行為動詞）⇒継続用法

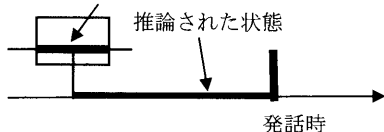
3.1.2 現在完了進行形の意味

現在完了進行形（Present Perfect Progressive）という文法用語はある意味で矛盾したものである。現在完了は行為の完了を示し、進行形はその事態の始点、終点を意識から外すことにより未完了であることを示す。そうするとある事態が完了しているのか未完了なのかこの用語では混乱を招く。現在完了進行形の現在完了は、次のように整理して解釈するとよい。

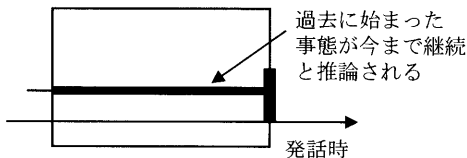
(28) 現在完了進行形の意味のまとめ

- (i) ある過去の事態がある。
- (ii) 進行形にすることでその当該の過去の事態の始点と終点が視覚範囲（意識）から切り離され、その間にくるその行為の典型的な部分を描写することになる。
- (iii) この未完了の過去の事態が先行し現在に関連性を持つ。関連性は(a)と(b)の2つの解釈可能性がある。

(a) 過去の継続的事態



(b)



- (29) a. Somebody has been eating my soup.
b. Somebody has been sitting in my chair and now it's broken.
c. My father has been washing his car.
d. My father has been repairing his camera.
e. We've been living in a tent for over a year.

(29 a, b)は *Goldilocks* という絵本からの引用である。「森に散歩に出かけた熊の家族が家に帰ってみると自分のスープが誰かに食べられてしまい、器が空になっている。さらに椅子にも誰かが座っていた様子でありしかも椅子は壊れている」という場面での発話である。ここで今現在ではスープを食べている人はいないし椅子に座っている人もいない、ただその証拠、痕

跡があるという点に注意しなければならない。過去の継続的な事態の結果状態が今見られるということになる。これは(a)図の説明になる。現在完了進行形は今もその事態が進行中である、という説明がなされるが「現在時点での継続性」も推論による含意である。この例では somebody が主語であり、これは存在が不明確であり、現在はその場にはいないことが含意される。しかし(29 c, d, e)では過去に始まった事態が今も継続中である。下の(30 a, b, c)を見られたい。

- (30) a. *My father has been washing his car and now he is in the living room drinking tea.
b. *My father has been repairing his camera and it is in perfect condition now.
c. *We've been living in a tent for over a year and now we live in this house.
d. We have lived in a tent for a year and now we live in this house.

これは wash his car と repair his camera は達成動詞であり完結点がある。しかし進行形にすることにより、非有界的に解釈される。これにより終了点が視覚領域から外され動作の中心的部分に焦点が置かれる。さらにそれが現在完了のフレームに埋め込まれていることにより何らかの現在との関連性がなければならない。それは動作が終了されず継続され現在時点との関連を持つことで実現する。つまり(b)図がこれに対応する。また状態動詞 live を be living と進行形にすることで一時的状態が作られるが、これが現在完了のフレームに埋め込まれるため、現在との関連が生まれ、一時的状態が現時点まで繋がるという解釈になるのである。これも(b)図が対応する。現在完了進行形が持続の副詞句と共に起する場合、現在までの継続は義務的であると Meyer-Viol & Jones (2011) は指摘している。

3.2 未来表現の意味論

未来時を表現するには現在との繋がりを意識するものと、切り離された時間として未来を扱うものに分けることができる。前者は *be going to* ～形式であり未来の出来事が現在との繋がりの関係で描写される。この点、過去の出来事が現在との繋がりを持つ現在完了と類似性を持つ。後者は *will/shall* を使うものである。過去形が現在から切り離されているように未来時の出来事が現在から切り離されて描写される。⁵

3.2.1 現在から未来への投射—*be going to* ～形式

この形式は現在に意識の焦点を置き、そこから今後を眺める (*premediativeness*) という特徴を持つ。しかしこれも2つの用法が意味的に区別可能である。一つは主語の既に持っている計画や意図を表現するものである。もう一つは現在成立している状況から未来の可能な出来事を述べるものである。

- (31) a. Kenji is going to learn to swim.
b. Kenji is going to be a grandfather next month.

(31a)の伝達の中心は健二の既に持っている計画である。(31b)は今の状況(健二の娘が妊娠していること)からみて当然来月には健二に孫ができ、おじいちゃんになるはずであることを示す。一方、助動詞を使った未来表現は未来を現在の諸条件からは切り離して捉えるものである。助動詞 *will/shall* は意志、主張を本来の意味として持つ。意志は未来を志向するから未来の出来事を予想する表現へと意味が拡張したと思われる(成田 2011、Radden & Dirven 2007)。この *will* の使用法は、(i) (既に持っている計画ではなく) 今この発話の時になされた決心や約束(「それじゃ…の *will*」)、(ii) (probably や maybe と共に使用される) はっきりとは述べられない未来予測(「多分の *will*」)と考えておくとよい。

- (32) a. It will probably rain today.
b. I think it's going to rain today. (Randy Newman の歌のタイトル)
c. A : We are having a party tonight.
 B : Then I'll be at your house around 7:00 PM.
d. Maybe I will move to Sydney next year.
e. I'm going to visit Sydney next week.

(32 a)は中立的な未来予測で天気予報などではこのように will を使う（「多分の will」）。(32 b)は既に雨の予兆（黒い雲、風）を感じて述べている。(32 c)は「パーティーがある」との相手の発言に「それじゃ7時に行くよ」と約束している（「それじゃ…の will」）。来年のことで断言できない、まだはっきりとして計画がない状態では(32 d)のように will がふさわしい。一方来週のことでは当然既に計画がある場合には(32 e)のようになる。

第4節 動詞と時制、アスペクトの指導方法

ここでは第1節の言語教育に関連する基礎概念と第2節、第3節の意味論的議論を踏まえて動詞と時制、アスペクトの指導法を考えてみる。

先ず一般的な留意点から始める。最初に学習者として大人と児童を区別する必要がある。児童には文法用語を使った指導は馴染まない。このため児童の持つ規則発見能力（仮説形成推論と帰納推論）を刺激する方式が取られる必要がある。この場合、ピクチャーカード、実物提示、ビデオ教材、TPR、ジェスチャー、ゲーム、絵本、紙芝居、英語寸劇、歌、ジャズチャントなど視覚、聴覚、触角、身体運動能力に直接訴えかけるような身体化認知経験を充分与えるように工夫しなければならない。また児童は注意が長時間は維持できないため一つの活動は7～8分以内に収めなければならない。第1節で言及した社会文化理論的な理念を教室の中で実現するため、楽しく学習が進む協同的な学習環境を構築することが望ましい。一般的に児童（特に低学年）はゲーム、歌、TPR、ジェスチャーなどの参加に抵抗が少なく協同的学習環境に馴染みやすい。

一方、高校生を含む大人の学習者に関しては、教授者は理論的説明を充分咀嚼した上で学習者の理解度に応じて文法用語を交えて適宜説明することになる。この場合、児童への教授方法を成人の学習者に合うように工夫して取り入れることは多に推奨されるべきである。抽象的な使用規則群として与えられた外国語の知識だけではその後の運用につながらないことが多いからである。しかし思春期以降の成人学習者は当然身体を動かすことや歌などに抵抗感があり、児童のように円滑に望ましい協同的な学習環境に導くことが難しい。単なる音読でさえも英語らしく発音することに抵抗感を持つ学習者は多い。しかしビデオ教材の視聴、歌の聴解のような受け身の身体化経験には抵抗は少ない。また簡単な認知図式を使った説明にも興味を示すことが多い。そこでそのような受動的な身体化経験から始め、次第に能動的な要素を加味していくことが考えられる。この節では児童への動詞、時制、アスペクトの指導を中心に据えるが、その多くは成人にも適用可能である。

4.1 早期英語教育での動詞、時制、アスペクトの取り上げられ方

先ず児童対象の英語教材2種を取り上げ、動詞やアスペクトに関してどのような順序で導入しているのかを確認し、それを基礎資料として適切な指導方法を検討することにする。取り上げる2つの児童英語教材は下記の通りである。

Rivers, S., and Toyama, S. (2001) *English Time*, Book 1～6 (Oxford University Press)、Nakata, R., Frazier, K., Hoskins, B., and Graham, C. (2007) *Let's Go* Third Edition, Book 1～6,

(Oxford University Press)、

この2種類のコースブックは日本だけでなくアジア各地でも広く使用されている(詳しいシラバスは「付録1、2」を参照されたい)。2種類ともコミュニケーション力養成に力点を置くが既習項目が何度も繰り返されるスパイラル方式になっている。また一つのアプローチに偏ることなくTPR法、機能アプローチ、コミュニケーションアプローチ、オーディオリンガルメ

ソッドなどの折衷シラバスになっている。両者に共通する動詞、時制、アスペクトの取り扱いに関する特徴としては次のようなことがあげられる。

③3) *English Time* と *Let's Go* に見られる特徴

- (i) 文法項目全体の導入方針として「具体から抽象へ」という基本順序が守られている。
- (ii) 動詞の導入：Be 動詞（同定 I'm Annie、属性 This is pink、She's tall、状態 I'm happy の順）の後、Have 動詞、一般動詞、不規則動詞の順になっている。
- (iii) 「欲求・好み」の動詞の早期の導入と意味の対比的提示： I like apples/I want an apple。
- (iv) 現在進行形の後で一般動詞現在形を導入する傾向がある（特に *English Time*。*Let's Go* では進行形と習慣の現在同時導入）。
- (v) 過去形は be 動詞を先ず導入。一般動詞過去形、過去進行形の順に提示する。
- (vi) 未来表現は be going to ~ の後で will を導入する。
- (v) 複文は He was talking on a cell phone when the bell rang のように過去進行形 + when 節のパターンを導入。その後 If 節を導入する。
- (vi) 現在完了形は経験、完了、継続の順で導入。その後、現在完了進行形に進む (*Let's Go* のみ)。

現在完了形は過去形との対比で理解されなければならないが、そのためまず過去形を導入し、また現在完了形でも理解しやすく具体的な経験の用法から提示するなど、具体から抽象の原則と対比構造の導入は両テキストとも全篇を通して認められる特徴である。

4.2 早期英語教育での具体的指導法の検討

ここでは(i)現在進行形と現在形（習慣）の対比、(ii)like/want の対比をともなう学習、(iii)過去形の BE 動詞から一般動詞過去への拡張、(iv)未来表

現の be going to の導入と will の使用への展開、(v)過去との対比による現在完了形の経験用法の導入という5つのテーマについて上記2つの早期英語教育テキストを参考にしながら可能な指導の方法を簡略に述べることにする。

4. 2. 1 現在進行形と習慣を示す現在形の対比

現在進行形の指導の目標は、文脈を形成する絵や動画の中で、人物や物の動作（状況の知覚と発話が同時という意味で認知的具体性がある対象）を指し示すことができる場合に使える言語的道具であることを学習させることにある。一方、現在形の動詞は状態動詞の場合以外は、習慣読み（Kate always goes to school by bus）に見られるように発話の場面からは切り離された抽象性が高いものであり、理解が難しいため工夫が必要となる。以下に指導例を示すことにする。

④ 進行形の導入指導

[I] 参考教材： *English Time Book 1 Unit 2, 3, Let's Go Book 2 Unit 7* 等。

[II] 提示教材：ピクチャーカードには教室の場面の絵が描かれており子供たちは様々な動作をしている

（例： X is sleeping, Y is talking, Z is eating）。

[III] 前提となる既習事項： Point to ～、 Who is he? 登場人物名。

[IV] 手順

- (i) 教員はピクチャーカードの概要を説明し、コンテキストを児童に理解させる。この時、人物を指しながらその人物の動作を進行形で紹介する。

例： Ok, class. This is a picture of a classroom. Daisuke and Kyoko are here in this room. This is their teacher, Mr. Gilbert. He's writing with a pen. Ted is talking. This girl is eating an apple. Satoshi is reading a book, and Tomoko is sleeping.

- (ii) Ok class. Let's do the "Point to" game. Remember to point to the person who I'm talking about, OK?

Who's sleeping? Point to the person. Point to him or her?

Who's eating? Point to the person. Good. This girl is eating an apple.


(iii) Ok this time. Can you do this game with your friend?

(iv) Now this time I'll ask you questions. Listen to me and answer the questions, Ok?

What is Ted doing? Is he eating? Is he singing? Or is he talking?

That's right, Ted is talking.

What is Mr. Gilbert doing? Is he talking? Is he singing? Is he writing? Yes, he is writing with a pen.

このように文脈を導入した後、指で対象を示す受動的な理解から始まり、児童たちに発話を少しずつ促す。一方、現在形は発話場面とは切り離された状況や知識に言及する。このため指さしは使えない。そこで次のような工夫をする。その頭の中の状況を  のような吹き出しで表現することにする。

(35) 一般動詞（習慣）の用法の導入

[I] 参考教材： *English Time* Book3 Unit 3, 4, *Let's Go* Book2 Unit 6 等。

[II] 提示教材： Daisuke, Kyoko が家族の日常について話している場面のピクチャーカードを提示。

[III] 前提： 既習事項としてフォニックスにより綴りと発音の関係がある程度理解できている。

登場人物の名前と動詞（get up, eat lunch, practice the piano, watch videos）。

[IV] 手順

(i) 今日の授業トピックの導入

Ok, class. We will talk about what we do every day. What do you do in the morning?

That's right, brush your teeth and wash your face. After that? Of course, we have breakfast.

When do you leave home for school? Around 7:30? When do you practice the piano?

- (ii) ピクチャーカードを示す。

Ok, class. Look at this picture. Where are Kyoko and Daisuke now? At home, or at their school?

Yes, they are at their school. What are they doing? Yes, they are talking.

- (iii) モデルとなる会話を聞く。

Ok now listen to their talk.

Daisuke: When do you eat breakfast?

Kyoko: I usually eat breakfast at 7:00.

Daisuke: When does your brother eat lunch?



He eats lunch at noon.

Daisuke: When does your sister watch videos?

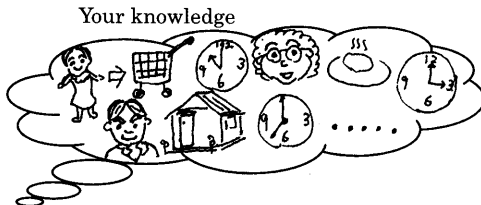



She watches videos in the evening.

- (iv) モデルの音読 This time repeat after me.

- (v) 練習 Ok, class. Practice saying.

When does Kyoko's {
 mother go shopping?
 father return home?
 grandmother has a snack?



質問を読み Kyoko の  の中の既存情報を指さし、学習者に応答練習を促す。

4. 2. 2 Want/like の対比

児童たちにとって自分の好みや希望を表現する want/like は彼らの心理に近い表現形式である。このため児童英語のテキストでもこれらはかなり初期に導入される。Like は対象が普通名詞の場合には普通「～というものが好きである」という意味であるから総称性を持つ名詞になることが多いことに注意が必要である。I like an apple ではある特定性 (specificity) を持つ対象と解釈され「リンゴが好き」とはならない。一方、want は特定性を名詞に付与しないので I want an apple は「リンゴが一つ欲しい」ということであり意味的に整合する。

③6 want/like の指導

[I] 参考教材：English Time Book 1 Unit 7、Book 3 Unit 1、Let's Go Book 1 Unit 7, 8、Book 2 Unit 4 等。

[II] 提示教材：ピクチャーカード food items

- (a) want の対象として an apple/a banana/an orange/a hamburger/ a cookie/ a sandwich (一個の対象物が描かれている)
- (b) like の対象として apples/bananas/oranges/hamburgers/cookies/sandwiches (複数の対象物が描かれている)

[III] 前提：既習事項として綴りと発音の關係に初歩的理解があること。

[IV] 手順

[A] want の学習

- (i) 対象 an apple/a banana…などのカードを示しながらリピートさせる。必ず不定冠詞を付けて言う。
- (ii) I want () のパターンに各対象を入れて読みそのカードを取っていく。
- (iii) Do you want ()? Yes or No ? のパターンに各対象を入れ児童

に尋ねていく。

(iv) What do you want? 児童に尋ねていく。

[B] like の学習

(i) 指導者は黒板に貼った絵カードを指し大好きそうな表情で I like () のパターンに対象を入れてモデルリーディング。

(ii) 次に嫌そうな顔で絵カードを指さし I don't like () のパターンでモデルリーディング。

(iii) 児童を指名し Do you like () ? Yes or No? と尋ねる。

4. 2. 3 Be 動詞過去形から一般動詞過去形へ

過去は「自分から振り返って後にある」という時間を位置に置き換えるメタファーを利用することができる。Be 動詞の現在形と過去形で対比させ、過去を表す副詞表現の学習から一般動詞（規則動詞）の過去形を学習する。

37) BE 動詞過去形指導法

[I] 参考教材：*English Time* Book 3 Unit 10, 11、*Let's Go* Book 3 Unit 2, 3 等。

[II] 提示教材：場所のピクチャーカード 例：bookstore、hospital、museum など。

[III] 前提：既習事項としてフォニックスにより綴りと発音の関係がある程度理解できている。

施設を表す表現について理解している。

[IV] 手順

(i) 黒板に2つの場所のピクチャーカード（例 hospital, bookstore）を貼る。

Ok, class. Look at me. I am now at the bookstore と言いながらピクチャーカードを指さす。

Now I am walking. Now I am at the hospital と言いながらピク

チャーカードを指さす。

- (ii) I am now at the hospital, and a minute ago I was at the bookstore
と言いながら、後ろを振り返り病院のカードを指さす。振り返る動作で「過去」を認識させる。時間経過を位置の変化で理解させる。
この時、黒板に am と was を二段に書いておき、語の形としても認識させる。

- (iii) 人形を使って 3 人称の言い方を導入する。

Ok, class. What's his name? Yes. Kenji. Look at him. He is at the hospital. He is walking. He is now at the bookstore, and a minute ago he was at the hospital.

ここでも黒板に is と was を対比して書いておくとよい。

(38) 一般動詞過去形指導法

[I] 参考教材：*English Time* Book 3 Unit 12、*Let's Go* Book 4 Unit 1 等。

[II] 提示教：時刻の表示、基本動作を示すピクチャーカード。

[III] 前提：既習事項として綴りと発音の関係に初歩的理解があること。基本動作語：wash my hands, clean the room, practice tennis 等。

[IV] 手順

- (i) 黒板に間隔をあけて今の時刻と 2 時間前の時刻を書く（例：10:00 と 8:00）。

今の時刻の前で、Ok, look. I am now at school with you. 2 時間前の表示を振り返り指をさし、I was at home 2 hours ago と言う。

- (ii) 2 時間前の時刻の所に、手を洗っているピクチャーカードをはる。
washed, brushed は板書しておく。

今の時刻の前に立ち、I am talking to you now.

その位置で、2 hours ago at home, I washed my hands, I brushed my teeth とピクチャーカードを振り返り指さしながら言う。時刻表示と振り返りのジェスチャーで過去を理解させ、過去の形態素 ed を認識させる。以上を発展させ、take a test/took a test、go to the

park/went to the park、eat a hamburger/ ate a hamburger 等の表現を徐々に導入し、不規則動詞の過去形にも馴染ませる。

4. 2. 4 未来表現の be going to ～と will の導入

まず、be going to ～は既に計画がある場合や現状からみて明らかな予想であり、一方 will は発話時になされた決心や約束、はっきりと断言できない未来予想である。

(39) 未来表現 be going to ～の導入

[I] 参考教材： *English Time Book 4 Unit 4*、 *Let's Go Book 4 Unit 2* 等。

[II] 提示教材：人物のカード。

(計画を示す用例) 日常活動を示すピクチャーカード (計画) (get a haircut, rent videos, see a movie 等)

(現状からの推測) 天気のパクチャーカード (cloudy, rainy, stormy, sunny 等)。

[III] 前提：既習事項として綴りと発音の関係にかなりの理解があること。

過去形とその意味についてある程度の理解ができていること。

基本動作語：get a haircut, rent a video, see a movie 等を理解できること。

[IV] 手順

(i) 黒板に向かって左から右側に長い矢印を描く。真ん中に今日の日付を書き today と書く。黒板に向かって右側に明日の日付と tomorrow と書く。左側に昨日の日付と yesterday と書く。

(ii) 教師は今日の位置に立つ。昨日の所に「映画を見る」を示すピクチャーカード、明日の所に「散髪をする」のピクチャーカードをはる。

Ok, class, today is Tuesday, 22, yesterday was Monday, 21., and tomorrow will be Wednesday, 23.

今日の位置から左側の昨日の位置を振り返りながら Yesterday I saw

a movie、今日の位置から右側に向き自分の前方に両腕を伸ばし Tomorrow I am going to get a haircut と言う。次に男子、女子の人物カードで He と She についても同様に練習する。

- (iii) 人物カードと日常活動カードを黒板に配置する。

What is Kyoko going to do this afternoon? と言いながら日常活動を指し示し児童に英語で反応させる (She is going to go shopping this afternoon 等)。これを他のカードで繰り返す。

- (iv) 授業時の実際の天気に合わせて昨日、今日、明日 (予想) の位置に天気ピクチャーカードをはる。

今日の位置に立ち Today it's sunny and very hot と言う。次に左側、昨日のピクチャーカードを振り返り It was rainy yesterday (実際の天気) と言う。次いで右側を向き考える様子で What is the weather going to be like tomorrow? とクラスに聞く。それから窓の外を見て Look! It is going to be sunny again tomorrow と言う (現状からの予測)。応答練習のあとシャドーイング練習。

40) 未来表現 will の導入

[I] 参考教材 : *English Time* Book 4 Unit 6、*Let's Go* Book 5 Unit 5 等。

[II] 提示教材 : 黒板に次の日常の会話を書いておく。

ex.1 A: I want to eat a hamburger. (ハンバーガーのピクチャーカード)

B: Ok, I will go with you.

ex.2 A: I don't find my umbrella. (傘のピクチャーカード)

B: Ok, I will help you.

ex.3 A: What do you think of your future? (10 年先の数字を書いておく (例) 2022)

B: Maybe I will be a pianist.

[III] 前提 : フォニックスにより綴りと発音の關係に充分な理解があること。未来表現 be going to を学習していること。基本語 : eat

a hamburger, find my umbrella, what do you think of ~, your future 等を理解できること。

[IV] 手順

- (i) 教師が会話例をジェスチャーを伴い読む（ハンバーガーを食べる、傘をさがす、未来を示す数字を眺め考えるジェスチャー）。児童にリピートさせる。
- (ii) 児童間でロールプレイ、その後、チャンクチャンツ（後述）練習。

未来表現 *be going to* ～と *will* の区別は既に述べたように *be going to* ～は既に計画がある場合や現状からみて明らかな予想であり、一方 *will* は発話時になされた決心や約束、はっきりと断言できない未来予想である。この違いを学習者に教えるのは混乱を招くだけかもしれない（多くの早期英語テキストでは両者を交換可能な表現としている）。しかし厳密には違いがある以上、英語の例を工夫して気付かせるようにしたい。また高校生以上にはコロケーションをリズムで覚えやすくしたチャンツが効果があるかもしれない。ジャズチャンツは基本的に英語の持つストレスとイントネーションパターンを体得できるように工夫したものであるがコロケーションを耳から覚え、その定着を図る働きを持たせることも可能である。著者はこれを「チャンクチャンツ」と呼んでいる。未来表現の *will* の使用例を示すチャンクチャンツは例えば次のようになる。

- (41) Someone is knocking there. I'll get it. I'll get it.
 Someone is calling there. I'll get it. I'll get it.
 A fly ball is falling on you. I'll get it. I'll get it.
 A fried shrimp is now ready. I'll get it. I'll get it.

4. 2. 5 過去形から現在完了（経験用法）への導入

過去形との違いから自然に現在完了の経験用法を学習することができるように指導する。

42 現在完了（経験用法）の導入

[I] 参考教材： *English Time Book 6 Unit 5*、*Let's Go Book 6 Unit 5* 等。

[II] 提示教材：黒板に左から右へ矢印を書く。右端近くに今日の日付、少し左に昨日、先週の日付を書く。

パンダ、ライオン、クジラなど日常身近にいない動物の人形を準備。

[III] 前提：フォニックスにより綴りと発音の関係に十分な理解がある。自分の誕生日が英語で言える。

Yesterday, last week 等の表現が理解できること。過去形 Did you see ~? が理解できること。

[IV] 手順

(i) 児童を一人指名し、黒板の前に来させる。

Ok, Ken chan. What is your birthday? Ok, your birthday is November 30, 2004. You're 8 years old, aren't you? ここで誕生日を線上に記入する。

Ok, good. This point on the arrow shows today, January 19, 2012, and this point shows yesterday, so January 18, and this point is your birthday, November 30, 2004, Ok?

今日、昨日、先週、誕生日の位置を確認する。それからパンダのぬいぐるみを取り出して見せる。

Then look at this animal. What is this? Right, this is a panda.

昨日の位置にパンダを持っていき、尋ねる。

Ken chan, did you see a panda yesterday? No?

先週の位置にパンダを持っていき、尋ねる。

Then did you see a panda last week? No?

誕生日から今日の位置までゆっくり手で辿り、尋ねる。

Have you seen a panda before?

児童は過去形とは違う意味、形式であることから「今までにパンダを

見たことがあるか」という意味に推論し、Yes と答える。そこで教師は Yes, you have seen a panda before と補足する。これを他の児童、他の動物で繰り返す。

以上で5つのテーマについて簡略的ではあるが可能な教授方法の一部を説明した。留意すべきことの一つは、以上の教授プランの素描にも現れているが、英語の綴りと発音の関係について学習者がある程度理解していることが指導を容易にするということである。早期英語教育では音声のみに限定せず、フォニックスなどにより文字と発音の関係も学習する方が良いと思われる。学習者は文字で視覚的に文法項目を確認することができ対立的要素との比較もしやすい（例えば、is/was）。教育の方法に幅を持たせる意味でも文字の導入は必要であろう。

第5節 総括

動詞、アスペクト、時制について意味論的知見を要約しそれを早期英語教育の場で教える際にヒントとなるよう、いくつかの授業展開例を示した。もっともこれらは高校生以上の学習者にも適宜文例や文脈を代えれば取り入れ可能である。さて未だ十分な説明には程遠いのであるが動詞、アスペクト、時制に関する問題は極めて複雑で一筋縄ではいかぬことをもって目下の弁明とし、実践と理論研究を通じさらに内容を拡充していくことを今後の目標としたい。また動詞に関わる議論ではモダリティ、構文論が関与するがこれらについては稿を改めて述べる予定である。

* 本研究は文部科学省科学研究費（基盤研究(c)課題番号 21520612 平成 21 年度～平成 23 年度「第二言語の文法習得における推論の役割に関する基礎研究」研究代表者 濱本秀樹）の研究成果の一部である。

付録 1

時制、アスペクト関連文法項目の児童英語教科書“*English Time*”での出現順序,

English Time	文法項目	例文
Book 1 Unit 1	Be 動詞	I'm Annie.
Book 1 Unit 2	Be 動詞	This is a butterfly.
Book 1 Unit 3	Be 動詞	What's this?
Book 1 Unit 6	Be 動詞	Are you happy? I'm not.
Book 1 Unit 7	動詞 like	I like hamburgers. You don't like ~
Book 1 Unit 8	動詞 like	Do you like apples? No, I don't.
Book 1 Unit 10	Be 動詞	Is he a doctor? No, he isn't.
Book 1 Unit 11	Can	She can climb a tree. I can't ride a bike.
Book 1 Unit 12	Can	Can you swim? No, I can't.
Book 2 Unit 1	Be 動詞	Who's he?
Book 2 Unit 2	進行形	I'm drawing. She isn't writing.
Book 2 Unit 3	進行形	They're singing. We aren't crying.
Book 2 Unit 4	進行形	What's he doing? What are you doing? We're walking to school.
Book 2 Unit 9	Have 動詞	You have candy. I don't have juice.
Book 2 Unit 10	Have 動詞	She has a fever. She doesn't have a rash.
Book 3 Unit 1	動詞 want	I want a fish. He doesn't want a rabbit.
Book 3 Unit 3	一般動詞	When do you exercise/have a snack/ watch videos? I exercise in the morning/afternoon.
Book 3 Unit 4	一般動詞	How do they go to work? She goes to work by bus.
Book 3 Unit 5	動詞 hurt	His foot hurts.

Book 3 Unit 8	There 構文	There's some grass. There isn't any sand.
Book 3 Unit 10	Be 動詞過去形	I was at a bookstore. I wasn't at the hospital.
Book 3 Unit 11	Be 動詞過去形	Was she in the yard? No, she wasn't.
Book 3 Unit 12	一般動詞過去形	I called a friend. I didn't dance.
Book 4 Unit 2	不規則動詞過去形	She brought tickets. She didn't buy cotton candy
Book 4 Unit 3	不規則動詞過去	What did she do?
Book 4 Unit 4	Be going to ~	I'm going to ride the bus. She isn't going to take a taxi.
Book 4 Unit 5	Be going to ~	What are you going to have? I'm going to have a hot dog.
Book 4 Unit 6	未来 will	I'll plant flowers in the spring. She won't go skiing.
Book 4 Unit 9	Like to do	What do you like to do?
Book 4 Unit 10	Like V ing	She likes singing.
Book 4 Unit 11	Want to see Let me V	I want to see Mercury. Let me look.
Book 5 Unit 1	There be 動詞過去	Was there a library beside the post office?
Book 5 Unit 4	経験の現在形	Do you ever fall in love?
Book 5 Unit 5	一般動詞習慣	How often do you read a newspaper?
Book 5 Unit 7	複文：過去進行形 + when 節	What was he doing when the baboon walked by?
Book 5 Unit 8	could	When you were little, you couldn't peel an orange.
Book 5 Unit 9	過去の期間	How long was he there? He was there for one week.
Book 5 Unit 10	複文：If 節	If I skip lunch, I'll be hungry.

Book 6 Unit 3	過去分詞 (形容詞)	Aren't you discouraged/worried/ surprised?
Book 6 Unit 5	現在完了(経験)	Have you ever seen a tidal wave?
Book 6 Unit 6	現在完了(完了)	I have already read the magazine.
Book 6 Unit 9	現在完了(継続)	They've played the piano since they were three years old.
Book 6 Unit 10	受動態	The cookies were bought by Jack.

付録2

時制、アスペクト関連文法項目の児童英語教科書“Let's Go”での出現順序

Book 1 Unit 1	Be 動詞	This is a globe. Is this a globe? No, it isn't.
Book 1 Unit 3	Be 動詞 /Can	What color are these? I can count to ten.
Book 1 Unit 4	Be 動詞 /can't	She's tall and pretty. I can't find my book.
Book 1 Unit 7	want	I want chicken. Do you want fish? No, I don't.
Book 1 Unit 8	Like/want の対 比	Do you like lions? I don't like tigers. What do you like? I like sandwiches. What do you want? I want a sandwich.
Book 2 Unit 1	Be 動詞 / 一 般 動詞 (現在習慣)	Are these clocks square? I erase the board at school.
Book 2 Unit 2	Have 動詞 /can	She has a camera. Does she have a candy bar in her bag? She can run.
Book 2 Unit 3	Live/There 構 文	Where do you live? I live in Hillsdale. There's a lamp behind the sofa.

Book 2 Unit 4	Want/like/can	What does he want? What does she like? Can he type?
Book 2 Unit 5	一般動詞（現在習慣）/can	I wake up every morning. Can Mrs. Hill play baseball?
Book 2 Unit 6	一般動詞（習慣）	What do you do every afternoon?
Book 2 Unit 7	進行形 / 一般動詞（現在習慣）	She's dancing. What is she eating? Do you cook dinner every evening?
Book 2 Unit 8	一般動詞（現在習慣）	What do you do on Monday? I go to English class after school.
Book 3 Unit 2	Be 動詞過去形	Where was she this morning? It was sunny yesterday.
Book 3 Unit 3	Be 動詞過去形	There were two chairs in our bedroom. The books were under the desk.
Book 3 Unit 4	進行形 wearing	She's wearing a big, old, blue sweater.
Book 3 Unit 7	一般動詞（現在職業）	A mechanic fixes cars in a garage.
Book 4 Unit 1	一般動詞過去形	He had a party yesterday. He found some money.
Book 4 Unit 2	Be going to ~	She wants a cat. She's probably going to go to the pet store.
Book 4 Unit 3	Want to ~	She doesn't want to build a house.
Book 4 Unit 5	一般動詞過去形	What did he do yesterday? He practiced the violin.
Book 4 Unit 7	Be going to ~	He's going to rent a DVD tonight. When is Ben going to play with his friends?
Book 4 Unit 8	Like to ~	Do they like to watch sports on TV?
Book 5 Unit 2	過去進行形	What was he doing yesterday? He was taking pictures.

Book 5 Unit 5	will	Will she sing a song?
Book 5 Unit 8	現在完了形 (経験)	Have you ever eaten fried noodles? No, I haven't.
Book 6 Unit 1	複文：過去進行 形 + when 節	He was talking on a cell phone when the bell rang.
Book 6 Unit 2	形容詞用法：過 去分詞と現在分 詞	The clowns were frightening. He was frightened.
Book 6 Unit 3	仮定 could/ should と過去 形の対比	He could get her a music player or a camera. He should get her a camera.
Book 6 Unit 5	現在完了(経験) 受動態	Have you met Ann? The alarm was set.
Book 6 Unit 6	現在完了(完 了、継続) 現在完了進行形	Has she already moved? No she hasn't moved yet. She has lived in Bangkok since 2006. She has been practicing the piano for 30 minutes.
Book 6 Unit 7	Could (過去可能)	Could you swim when you were two?
Book 6 Unit 8	仮定法	If I could go anywhere, I'd go to Antarctica. If I could buy anything, I'd buy a pony

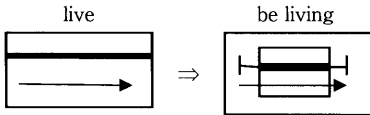
注

- さらに付記すると時間の経過を意識しないで物を示すのが名詞、時間の経過を意識しないで、物事の有様を描写するのが形容詞となるだろう。
- 行為の終結点をめぐる問題について考えてみたい。Langacker (2001b) は "He is running around the pole" のような文では内在的終点がなく有界的動詞 (perfective) ではない。それ故 perfective + progressive ⇒ imperfective という Langacker の定式は妥当しない、という批判があることを指摘している。Langacker によればこの批判は間違いであり、プロセスが有界的であることが客観的に与えられ、その事態そのものに

固有の終点があると思ってしまうことである、という。あるプロセスが有界的かどうかは自然的な終点のあるなしに関わるのではなく、人間のエネルギー消費からみて、行為の永続は不可能であり有界的に捉えられることが大切だと述べている。英語には sleep, sit, stand, wear などのように内部的に均一と認められる行為動詞が多いがこれらも全て有界的と分類されている。達成動詞などの持っている行為の終結性は目的完結性 (telicity) に関連し、これは有界的でもある。しかし “She is changing the nappy” のような達成動詞の進行形は目的完結の意味 (telicity) は保持しているが有界性はない (unbounded) と考えられ、上記の Langacker への批判はこの目的完結性 (telicity) と有界性 (boundedness) の取り違えから生じたと思われる。Radden & Dirven (2007) では行為動詞には何らかの有界性を支える要素が必要であり、かつ有界性は何らかの概念領域で区切りが与えられることである、と述べて次の例をあげている。

- (i) a. ?They played.
 - b. ?They drank.
 - c. ?They worked.
 - (ii) a. They played marbles.
 - b. They drank Scotch.
 - c. They worked all morning.
3. 状態動詞の進行形も実際あり得る。
- a. Kyoko is living in Kobe.
 - b. I'm loving it.

状態動詞 live や love は元々内部均質な終点のない非有界的事態を示す。それを進行形にすることで有界的 (perfective) であるかのように扱い、再度非有界化 (imperfective) 化することにより、本来存在しないはずの終点を (直接的な狭い視野領域の外ではあるが) 広い視野領域に導出する効果を持つ。そこから「一時的な状態」という解釈が生まれる (Langacker 2001b: 12)。



4. Langacker (2001b) の現在時制の規定では発話時に言及しない非時間的用法を仮想世界での出来事としその出現が発話時と一致するという。もし視覚領域が仮想世界に置かれるなら「発話時間区間を超越する行為」「未来」「過去」を表す現在時制は、現在形のままで未来、過去を表すことになり説明は充分とは言えない。
5. 未来表現の will/shall はしかしながら意志を示す法性から完全に独立し中立的に未来時を表現できるというわけではない。このことを Lyons (1977) は「未来は完全に時間的概念というわけではない。必然的に予想あるいは関連する法的概念を包含してしまう」と述べている。欲求や意図は未来の動作を含むことから次第に未来表現に使われるようになったのである。Shall/will の用法とその区別の問題については成田 (2011) に興味深い説明があるので参照されたい。

参考文献

- Aliseda, A. (2006). *Abductive Reasoning: Logical Investigations into Discovery and Explanation*. Springer.
- Bloom, P. (2000). *How Children Learn the Meanings of Words*. The MIT Press.
- (2002). “Mind reading, Communication and the Learning of Names for Things.” *Mind and Language* . vol.17.
- Gibbs, R (2006). *Embodiment and Cognitive Science*. Cambridge University Press.
- Giorgi, A and Pianesi, F., (1997) *Tense and Aspect*, Cambridge university press.
- Gullberg, M. (2008). “Gestures and second language acquisition.” In P. Robinson and N.C.Ellis (eds.) *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition*. Routledge.
- 濱本秀樹 (2005). 「「ている」と現在完了のパズル—SRE理論の認知的再構築をめざして—」、成田義光、長谷川存古編『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』139-157, 英宝社.
- (2006). 「社会文化理論の英語文法教育への適用可能性」 *Shoin Literary Review* 38, 25-37.
- (2008a). 「早期英語教育論—なぜ児童は英語の絵本を文法、語彙知識なしで楽しめるのか」 *Shoin Literary Review* 41, 37-71.
- (2008b). 「早期英語教育における文法発見のプロセスについて」『英語教育研究』 31, 87-96.
- (2009). 「早期英語教育における仮説形成推論の役割」近畿大学文芸学部紀要論文集『文学・芸術・文化』20-2, 1-32.
- (2010). 「第二言語習得論の新展開」近畿大学文芸学部紀要論文集『文学・芸術・文化』22-1,43-67.
- (2011). 「意味に基づく英語文法教育論—名詞篇—」近畿大学大学院文芸学研究科『渾沌』 vol.8, 1-30.
- Johnson, M. (2004). *A Philosophy of Second Language Acquisition*. Yale University Press.
- Langacker (2001a). “The English present tense.” *English Language and Linguistics* 5, 251-271.
- (2001b). “Cognitive linguistics, language pedagogy, and the English present tense.” Pütz, M., Niemeier, S., and Dirven,R., *Applied Cognitive Linguistics I: Theory and Language Acquisition*, Mouton De Gruyter.
- (2009). *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton De Gruyter.
- Lantolf, J. P. (2000). *Sociocultural Theory and Second Language Learning*. Oxford University Press.
- Lakoff, J. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- Layons, J., (1977). *Semantics* vol.2, Cambridge university press.
- Littlemore, J. (2010). *Applying cognitive linguistics to second language learning and*

- teaching*. Palgrave.
- Littlemore, J and Low, G. (2006). *Figurative Thinking and Foreign language Learning*. Palgrave.
- Meyer-Viol, W.P.M., and Jones, H.S. (2011) "Reference time and the English past tenses." *Linguistics and Philosophy* 34, 23-256.
- 中西 充一、富永英夫 (2011). 「時法を示す現在時制」 *TAM* 8号、3-21, TAM 研究会 .
- 成田義光 (2011). 「時法の助動詞 *Shall, Will*」 *TAM* 8号、23-36, TAM 研究会 .
- Ortega, L. (2009). *Understanding Second Language Acquisition*. Hodder Education .
- Pierce, C.S. 内田種臣編 (1986). 『パース著作集 2』 勁草書房 .
- Radden, G and Dirven, R. (2007). *Cognitive English Grammar*, John Benjamins.
- Sime, D. (2008). "Because of her gesture, it's very easy to understand, Learners' perceptions of teachers gestures in a foreign language class." In S. McCafferty and G. Stam (eds.) *Gesture, Second Language Acquisition and Classroom Research*. Routledge.
- Slattery, M. and Willis, J. (2001). *English for Primary Teachers*. Oxford University Press.
- Slobin, D.I. (1996). "From thought and language to thinking for speaking." In S. Gumperz and S. Levinson (eds.) *Rethinking Linguistic relativity*. Cambridge University Press.
- Swain, M. (2000). "The output hypothesis and beyond: Mediating acquisition through collaborative dialogue." in Lantolf, J.P. (ed.) *Sociocultural Theory and Second Language Learning*. Oxford University Press.
- Tomasello, M. (1992). *First Verbs*. Cambridge University press.
- (1999). *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press.
- (2003). *Constructing a language*. Harvard University Press.
- (2009). "The usage-based theory of language acquisition" in Bavin, L. (ed.) *The Cambridge Handbook of Child Language*. Cambridge.
- Vygotsky, Lev S. (1986). *Thought and Language*. Cambridge: MIT Press.